

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2131300599		
法人名	株式会社アイ・ディー・ジャパン		
事業所名	グループホーム ほのぼの		
所在地	岐阜県加茂郡東白川村越原16-1-1		
自己評価作成日	平成29年12月 5日	評価結果市町村受理日	平成30年 3月19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_2017_022_kani=true&amp;JizyosyoCd=2171300599-00&amp;PrefCd=21&amp;VersionCd=022">http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_2017_022_kani=true&amp;JizyosyoCd=2171300599-00&amp;PrefCd=21&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人 中部社会福祉第三者評価センター		
所在地	岐阜県関市市平賀大知洞566-1		
訪問調査日	平成29年12月24日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域に根差した暮らしの提供。</li> <li>・家庭的な環境で常に目と心の行き届いた介護</li> <li>・旬の食材を使った料理や郷土料理の調理</li> <li>・居住空間の季節ごとの飾りつけなどを利用者個々の力に合わせて役割分担を楽しく行う</li> <li>・職員自身も個々の個性や特技を生かし日常業務に創意工夫をもって取り組んでいる</li> <li>・利用者個々のニーズに応えられるようなケアの向上を目指している</li> </ul>
--

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

<p>訪問当日はX' マスイブ。ホームでは盛大なX' マス・パーティーが開催された。昼食が終わるとカラオケセットが準備され、歌詞カードやマイクロホンスタンドが用意された。開始時間となり、ギターを抱えた法人代表がサンタ姿で登場し、利用者、職員とともにX' マスソングや懐かしい歌の合唱となった。利用者全員がサンタクロースの帽子をかぶり、歌詞カードを見ながらの熱唱である。</p> <p>歌が終わると、サンタ姿の法人代表が利用者一人ひとりにX' マスプレゼントを配って回った。大きな紙包みの中には、利用者それぞれの一番欲しいものが入っている。プレゼントをもらい、感極まって涙を流す利用者もいた。最後は、職員手作りのX' マスケークとシャンメリーで乾杯し、大盛会のパーティーが終宴した。利用者を中心に、法人、職員の一体感を感じさせられた一日であった。</p>
--

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	住み慣れた村で暮らし続けることを意識した運営理念となっている。職員、利用者皆が家族のような家庭的な居場所造りを実践している。	“利用者同士の支え合い”と“家庭的な雰囲気の中で自分らしい生活”の支援を理念に謳い、玄関入口に掲示している。複数の家族から、「一人ひとりを大切にしたい支援」と、理念の実践を裏付ける讃辞があった。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	小さな村の唯一の入居施設でもあり、村民も皆顔見知りのような環境であるため、地域からも暖かく見守っていただけている。	全利用者が村内出身者で、職員の多くも村内に居を構えている。利用者の作品を文化展に出展し、会場のはなのき会館に見学に行った。食事は「茶の里野菜村」で摂り、“芸術の秋”と“食欲の秋”を堪能した。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	老人クラブの方など地域の方が施設に出入りすることにより、認知症の方にじかに接することによりについての理解などが広まっていくと考えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議へ各地域からの民生委員が参加して下さるようになったりして、施設への理解を広げることが出来、いろいろな話をし交流をすることができている。ご家族からの率直な要望などを聞ける場にもなっている。	利用者・家族、村役場・村民課の担当者、地域包括支援センター職員、民生委員等を集め、年に6回の運営推進会議が開かれている。状況報告、意見交換が行われているが、スライドを使った説明もある。	家族の参加がない開催回もある。根気強く、会議への家族参加を呼び掛けることを望みたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	役場の担当者は運営推進会議に毎回参加してくれており、ホームの状況などもよく把握してくださっている。距離が近く、相談もしやすい環境となっている。	役場の村民課と地域包括支援センターの職員が、毎回の運営推進会議に出席しており、ホームの運営状況を行政は十分に把握している。村内に唯一のホームであり、緊密な連携関係にある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の中にはスピーチロックなどももちろん含んだ中での排除の取り組みを行っている。事故や危険防止という理由であっても拘束をしないで防ぐ方法を常に考え実行している。	利用者と職員が和気あいあいと生活を楽しんでおり、身体拘束とは無縁な雰囲気がある。しかし、万が一にもあってはならないこととして、ホーム内の勉強会で「身体拘束」や「スピーチロック」に関する正しい知識を学んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の起こるような環境を作らないことも虐待防止につながるため、穏やかな気持ちで常に対応できるようなスタッフ間の環境づくりが出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	対象になるようなケースがこれまでないが、そういった制度があることは常に念頭に置き、必要時には提案できるようにしたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には疑問点などが残らない様に説明を行っている。その後も何かあれば即時に対応返答させていただき、ご納得いただけるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	受診の対応などをご家族にさせていただき施設に訪問する機会を作っていたらいい。他面会時などでも気軽にお話していただける関係づくりが出来ている。	村外に住む家族が多く、疎遠にならないように定期受診は家族対応を基本としている。運営推進会議に出席した家族からは、忌憚のない意見や質問が出ている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1回はミーティングを行い意見や気づいたことなどを話す機会を設けている。その他都度本社へは意見などを言える環境がある。	毎月開催される職員会議には、パート職員を含めた全職員が参加して意見を表出している。会議に限らず、法人代表や本部職員、管理者に対して、職員がいつでも自由に意見を言える環境ができています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	就業規定、給料規定にのっとり、人事考課なども実施し評価していく体制を整備している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修など、必要な研修は業務と認め参加している。毎月課題を提示し、内部での研修を行い業務のスキルアップをしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	村内に同業者はいないが、包括が推進会議に出席したり、必要時には互いに訪問するなどして提案できるサービスの内容を話し合ったりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時には事前情報を収集する他、全職員が細かな気づきなどを意見交換し、1日も早く落ち着いて暮らせる環境づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前から関係を築き、ニーズや悩みなどもお聞き話ししやすい環境づくりと安心して任せいただける関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前、入居時のアセスメントで細かく情報を収集し、その人に合った計画に基づいて援助を行えるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	全職員が利用者との関係を上下関係などを作らず、家族のように自然に持ちつ持たれつの仲を大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族の状況や考え方にも寄り添い、本人を取り巻く環境として同じように支えられるような関係づくりに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	施設そのものが馴染み同士の暮らしに加えて、地域との関わりも継続できるように努めている。	全ての利用者が同じ村の出身者であることから、従来からの友達同士、同じ職場に勤めた元同僚、ご主人の同級生等々、ホーム内で馴染みの関係が成立している。職員もまた、馴染みの一員である。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事の席、普段過ごされている場所にも工夫や見守りを行い、利用者同士が自然と声が掛け合えたり関わるができるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も経過をお聞きしたり、機会があれば面会に行ったりしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の普段の生活の中での言葉や態度などで希望や意向などを汲み取り、アセスメントを行いケアプランに反映したりしている。	毎月の職員会議で、職員個々が日々の支援の中で抱んだ利用者の思いや意向を徹底的に話し合っている。熱の入った会議は2時間に及び、議事録にも討議の内容が詳細に記録されている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前、入居時にご家族や、関わりのあった専門職などに情報提供をお願いしている。ご本人にも入居後などは会話の中で尋ねたりして情報を増やしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前、入居時、入居後、情報提供やご自身の普段の生活のリズムなどを把握し、施設での1日の暮らし方に反映させている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の全職員で行うミーティングや日常業務の中で意見やアイデアを出して反映したり、介護記録の内容も必要な内容などを決めて活用したりしている。	職員の意識を高めるために、介護計画の最新版を利用者個々の「介護記録」に綴じ込んで支援につなげている。利用者や家族の意向を尊重し、利用者の能力を活かす計画や、穏やかな生活を送るための計画が多い。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	重要なことは赤ペンで記入したり、職員間の情報共有の重要なツールとして活用している。毎日の業務の中で記録を見ながらその時必要な介護に活かすことが出来ている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	おひとりおひとりのニーズも違い、支援のポイントもそれぞれに合わせる必要があるため、必然と多様な対応になっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	限られた範囲での生活をしてこられた方が多く、村全体が地域資源となっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医への受診は原則ご家族にお願いしている。必要な場合には往診でもお願いしている。医師への情報提供は施設から行う場合もある。	ほとんどの利用者が、地域にある国保診療所をかかりつけ医として受診している。この診療所と医療連携を組み、24時間のオンコール体制を築いている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	村内の診療所との連携を行い、24時間のオンコール体制などで対応していただいている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は医療機関とも密に連絡をとり、情報交換を行うようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りについての指針を入所時に説明し同意をいただいているが、医療機関の性能上現在は看取りを実施したケースはここ数年ない。	協力医療機関が、「総合病院」から「診療所」に組織変更した。現時点では夜間の緊急体制が組めないことから、ホームでの看取りの実施は見合わせている。6年前を最後に、以降は看取りの実施はない。	利用者、家族共に、ホームを終の棲家としたいとの願望が根強い。訪問看護ステーションとの連携を模索し、看取り体制の再構築を期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員間やミーティングなどで事例に合わせて対応を考え周知している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	常日頃から防災への意識を高く持ち、考える機会を多く持っている。年2回の防災訓練においても毎回災害についても話し合っただけで対応を考えている。推進会議で行政や地域にもお願いをしている。	数年前、豪雨禍による行政からの避難勧告があり、指示に従って濁流の中を避難所まで逃げた。しかし、危険を伴った行動であったことが後の評価で明らかとなり、以後はホームで待機することに決まった。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者個々に合わせた言葉遣いや対応を心掛け不快な気持ちにならないような対応に努めている。小さな村のため、ホーム外でも尋ねられることもあるが守秘義務を徹底している。	職員の定着が良いことから利用者とも顔馴染みとなり、ともすれば“馴れ合い”にもなりかねない。しかし、研修を通して利用者の尊厳を守る支援を徹底しており、職員は声掛けをしてから支援に入っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が遠慮をすることなく、意見や感情を出せるような環境作りに努めている。利用者本位の徹底をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ある程度の1日の流れはあるが、中でもご本人のペースや気持ちを大切に、生活を送っていただけるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみを整える援助をしたり、化粧の習慣のある方などはお化粧をして過ごしていただくなどしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理の下準備をお願いしたり、季節の食材に触れることなど食事が楽しくなるようにしている。個人の出来ることで一緒に準備したりしている。	かつては調理のほとんどを利用者が行っていた時期もあったが、高齢化・重度化によって、現在では椅子に座ってできることを中心に手伝ってもらっている。利用者は、イベント外食の日を心待ちにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量などは個人の記録に残し、水分などは取りにくいときは提供のタイミングや内容を考えて不足しない様に配慮している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	声かけをし歯磨きを行っている。夕食時には全員の口腔ケアを確実にやっている。必要に応じて歯科受診や訪問歯科の協力を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者の出来ることに合わせて下着などは考えている。失敗したからとすぐにオムツにするなどではなく、自尊心を尊重しながら取り組んでいる。	排泄記録を付け、利用者個々に合った排泄支援を心掛け、排泄レベルを低下させない取り組みを行っている。トイレ誘導時には羞恥心にも配慮し、遠回しの表現を用いて声掛けをしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々の排便の有無、量、形状を確認観察、記録し職員間でも情報を共有している。それにより服薬や介助の内容時間なども判断している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	一日おきの入浴はお一人ずつ行い、無理に入浴させたりするのではなく、気持ちに寄り添って臨機応変の対応もしている。	浴室、更衣室ともに暖房設備が完備され、利用者は一日おきの入浴支援を受けている。体調の優れない利用者は、安全を考慮して職員2名態勢で介助している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々のペースに合わせ、居室で休まれるなども自由にしていただいている。その際には居室の環境も配慮し快適に休んでいただけるように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の記録ファイルに薬の情報を一緒にファイルし、確認できるようにしている。服薬については記録に残し、确实安全に行うよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の生活歴や仕事、趣味などに合わせて家事や娯楽、手作業をしていただいたりしている。アセスメントを行いながらいろいろなことをしていただくように努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在、活発に外出はおこなっていないが、季節行事などでは外食なども取り入れ施設以外で過ごす時間も大切にしたいと考えている。	夏や冬場は天候に左右されるが、気候の良い季節には積極的に外出支援を行っている。季節の花見や買い物、イベント外食等、非日常的にも外出機会は多い。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望される利用者は自分で管理している。買い物の希望があれば援助にてお買い物もされることもある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	特に制限は設けず、必要時には職員が援助をおこなっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者のほとんどが居間と台所の共有スペースで過ごされているため、日課やカレンダー季節の飾りなどを展示掲示している。そして快適に過ごしていただけるように配慮している。	民家を改造したホームであり、さらに増築して機能を高めている。玄関ホールとそれに続く食堂、居間があり、利用者は思い思いの場所でくつろいでいる。利用者は共用部分と居室とを自由に行き来し、食事の用意が整うまで居室で過ごす利用者もいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファーや椅子、床に座布団など、安全に快適に過ごしたい場所ですごせるような空間になっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	いろいろな部屋の形状があり、その時の状態などに合わせてお部屋を決めたりしている。ご家族の協力次第な部分もあるが、個々の部屋造つくりを心掛けている。	利用者のこれまでの生活スタイルや要望に応え、様々な形態の居室を用意している。利用者の状態や能力に合わせて部屋替えをすることもあり、利用者への最適な支援を実践している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	民家改修タイプの建物であり、奥まった部屋などもあるが、入居される方の性格やADLなどにも合わせて部屋を決めている。		